

Chapter II

自生的(自生的)近代性とリミナリティ

Indigenous Modernity and Liminality

目次

1. 近代性の概念と定義
2. 西欧近代性の特徴
3. 西欧近代性の限界
4. 脱近代性と代替的近代性
5. 多重的近代性と統摄
6. 東洋の自生的近代性
7. 東学思想の自生的近代性
8. 大巡思想の自生的近代性
9. 西欧近代性の東洋的起源
10. 比較:西欧と東洋の近代性
11. リミナリティ概念と思想的含意
- 12. 結論および
示唆点**

近代性の概念と定義

近代性(Modernity)は理性と科学、資本、国家の結合を通じて登場した新たな生活様式であり、中世以降人類が発見した普遍的価値である。

科学技術を世界認識の土台とし、資本と国家が結合して自然と人間を対象化し効率的に管理する生活の様態と規定される。

主要概念

合理化

科学技術

国家主義

資本主義

近代性の語源である「mode」は「今、ここ」を意味し、これは近代と脱近代の意味を同時に内包しうる。

西欧近代性の特徴

ウェーバーは近代性を「全社会の合理化(rationalization)」に圧縮して説明した

ヴェーバーの近代性3要素

- 合理的資本主義(rational capitalism)
- 合理的な法-行政体系 / 法治国家 (rational legal-administrative systems)
- 合理的な社会分化 (rational social differentiation)

西欧近代性の主要な特徴

理性中心主義

合理性の原則

真理の絶対性

科学的世界観

世俗化

デカルトの「我思う、ゆえに我あり(Cogito, ergo sum)」から由来した方法論的懐疑と理性中心主義が西欧近代性の認識論的土台を形成する

西欧近代性の限界

手綱を離れた欲望の結果として、近代は人類を前代未聞の絶滅の危機に直面させ、近代に対する批判理論である脱近代性(post-modernism)理論が大いに流行するようになる

脱近代主義者の批判

- 合理性の問題デカルトの「我思う、ゆえに我あり」に代表される理性中心主義が近代性の核心問題。ナルシシズム
- 的同一者:イデアや神を否定し、我からすべての法則を再定立するナルシシズム的近代性
- 他者の排除合理性の名のもとに他者を排除し疎外させる近代的思考

「他人は地獄である (*L'enfer, c'est les autres*)」

—ジャンポールサルトル(*Jean-Paul Sartre*)

ポストモダニズム登場の背景

1968年5月のフランス学生運動を契機に実存主義と構造主義の論争が始まり、以降ポスト構造主義(post-structuralism)へと発展して今日の現代哲学の巨大な流れを形成

脱近代性と代替的近代性の議論

脱近代性(Post-modernity)は近代性の批判とその限界を克服しようとする多様な代案模索の流れであり、西欧近代性をもたらした問題を認識し解決策を模索する思潮である

省察的近代性

ウルリッヒ・ベック(Ulrich Beck)が提示した概念で、近代化の反省と省察を通じた近代性の再構成を主張

液状近代

ジグムント・バウマン(Zygmunt Bauman)の理論で、現代社会の不確実性と流動性を特徴とする近代性

多重の近代性

アイゼンシュタットらが主張した概念で、地域的・文化的多様性に基づく異なる近代性の共存を認定

代替的近代性

西欧モデルを超えて、東洋の自生的近代性など多様な文明圏の独自の近代化経路に注目

主要特徴

近代性の限界の克服

地域的多様性の認定

省察と自己批判

文化相対主義

多重近代性と統攝理論

多重近代性(multiple modernity)は西欧以外の地域における近代性の発現を認定し、各社会が自体的に発展させた近代性の多様性を強調する概念



代表的学者

アイゼンシュタット(S. N. Eisenstadt)、ウィトロック(B. Wittrock)、アナソン(J. P. Amason)など比較歴史社会学者たち

統攝(統攝)理論

デカルト式合理性中心の西欧近代性に対する代案モデルとして、聖(聖)と俗(俗)の境界と関係の再配置を通じた近代性の説明

統攝1 軸の時代以降、聖(聖)が俗(俗)を統攝

統攝2 近代性は俗(俗)が聖(聖)を統攝する転換

統攝モデルは西欧の近代性(ウェーバーの宗教改革の事例)と東洋の近代性(宋代の性理学)を共に説明できる代案的理論

東洋の自生的近代性

自生的近代性(Autogenous Modernity)は我々の伝統に内在する近代的要素と、西洋の近代性に対応して我々の伝統を活かした独自の近代性を意味する

自生的近代性の主要な特徴

- ① 相関的思惟西洋の二分法的思考と異なり、世界のすべての要素が相互連結された関係の中で調和を成すという思惟方式
- ② リミナリティ聖(聖)と俗(俗)の境界において、省察的にこれを超えようとする試み
- ③ 内在的發展西欧の影響以前にも、東洋社会内部で自体的な近代化の過程が存在していた

東洋的近代性の事例

東学の民族主義

大巡思想の解冤相生

宋代の性理学

日本の京都学
派

中国汪暉の研究

東学と大巡思想は単なる西欧文明への抵抗ではなく、東洋の伝統と西洋の近代性を創造的に統合する独自の近代思想である

東学思想の自生的近代性

東学は壬辰倭乱以降の朝鮮における「全国民両班化」思潮の決定版であり、韓国の国民国家概念が初めて形成された思想的土台である

東学の自生的近代性の特徴

- 内在的思惟「宇宙の原理が身体に備わっているゆえに民心が即ち天心」という東洋思想の内在性の
- 強調。相関的思惟とリミナリティ、聖(聖)と俗(俗)の境界における創造的緊張関係の形成
- 宗教改革との類似性、西欧近代性の嚆矢である宗教改革との構造的類似性の共有

「東学の「再開闢」という表現は西欧近代性に対する東洋的起源を間接的に主張したものである」

東学と国民国家の形成

民族主義運動

民心=天心

万民平等

社会変革

東学は近代国家の出発とともに近代に対する批判的思惟までを同時に提示することで、近代性と脱近代性を包括する独特な自生的近代性の事例を示す

大巡思想が提示した近代性

大巡思想は120数年前の当時、西欧近代性の限界を予見し、東西洋思想を統合した代案的近代性を提示した

解冤相生(解冤相生)

相克(相克)に支配される怨恨関係を解消し、相生(相生)の道(道)を実現する
大巡思想の核心原理

怨恨の解消

相互共存

調和ある関係

東西融合的アップ

ローチ

西欧の合理性と東洋の道德性を統合し均衡のとれた近代性を追求

合理性と霊性

聖(聖)と俗(俗)の調和

東西思想の統攝

大巡思想が予見した近代性の危機と代案

- 西欧式近代性の物質主義が招来する人類絶滅の危機を予見
- 東西文明の調和ある相生が新たな近代性の代案であることを提示
- 省察的近代性と類似する概念を既に120年余り前に提示

「大巡思想が東西洋思想を総合して提示した近代性概念は、今になって現代危機克服の代案として注目され始めている」

西欧近代性の東洋的起源

最近の研究は、西欧近代性が東洋、特に中国の影響を受けたという事実を明らかにしており、マテオ・リッチ以降ヨーロッパの「中国熱風」が西欧啓蒙主義の発展に重要な影響を及ぼした

啓蒙主義思想家たちの東洋思想への影響

ヴォルテール	中国の宗教なき道德性を高く評価し、ヨーロッパの宗教的独断主義批判に活用
アダム・スミス	「見えざる手(<i>invisible hand</i>)」の概念が東洋思想、特に中国の自然秩序の概念からインスピレーションを受けた
ルソー	「天賦人権説(<i>Natural Right</i>)」が中国の文明と人性論(人性論)から着想されて発展

研究学者たち

トマス・メッツガー(Thomas A. Metzger)	フランク(Ande Gunder Frank)	ホブソン(John M. Hobson)	ジュリアン(François Julien)	ウッドサイド(Alexander Woodside)
------------------------------	-------------------------	----------------------	------------------------	----------------------------

主な示唆点

- ヨーロッパ物神主義の克服
- 知識の相互交流
- 隠蔽された歴史の復元
- 多重的近代性の認定

結論および示唆点

自生的近代性の再発見

近代性研究は「今、ここ」で絶えざる省察が必要であり、西欧中心の近代性を超えた代案的視角の拡張が重要である

東洋思想の現代的含意

東学、大巡思想のような東洋の自生的近代性は単純な歴史的遺物ではなく、現代社会の問題に対する省察的代案を提示する

融合と新たなパラダイム

西欧と東洋思想の統攝とリミナリティ概念を通じて、近代性の肯定的側面は維持しつつ限界を克服する新たな社会パラダイムの模索が可能である

「近代性を超えた新たな
近代性へ」